

“南朝四百八十寺”のよみ方

——音韻同化 assimilation の一例——

小 川 環 樹

The Pronunciation of 南朝四百八十寺

—An Example of Regressive Assimilation—

In Ancient Chinese, the existence of finals -p, -t, -k distinguishes the entering tone words from those in the other tones (even, rising and falling tones). It has been maintained, however, since the Southern Sung period (12~13c.), that in T'ang poems certain words in this tone should be pronounced without that characteristic.

A remarkable example may be found in the line “南朝四百八十寺” by Tu Mu (杜牧, 803~852). Though the character “十” is supposed to be read as <zip>, in this case a pronunciation <zim> was recommended to be right. As an evidence to show that, Lu Yu (陸游, 1125~1210) pointed out the fact that in the dialect of K'ai-fêng, the capital of Sung, “十二” in the expression “八文十二” (not worth a straw?) was pronounced not as <zip-ni> but as <zim-ni>. This change zip-ni > zim-ni can reasonably be explained by the nasalization of -p as a result of regressive assimilation.

The texts in Tibetan transcription recently presented by Prof. Walter Simon (cf. BSOAS vol. XXI part 2, London 1958) teaches us that “十二” was already pronounced as <sim-zi> in China under the T'ang at the beginning of the 9th century.

Tamaki OGAWA

唐の詩人杜牧(803~852)の七言絶句の中でも、とりわけ名だかい作:

千里鶯啼緑映紅, 水村山郭酒旗風, 南朝四百八十寺, 多少樓台煙雨中

(樊川集卷三 江南道中春望)

は、わが国で流行した“三体詩”などの選本では“江南春”の題で知られている。この詩

小川環樹: 京都大学文学部教授 (中国文学・語学). Tamaki Ogawa: Professor of Sinology,
University of Kyoto

の第三句の「八十寺」の三字は、古来ハツシンジと読むべきだと言われた。私は少年のころ《国訳漢文大成》に収められた釈清潭氏の注釈によって知ったが、なぜそうなるのか分らなかった。近ごろ熊谷立閑の《三体詩備考大成》を開いて見たら、「八十寺十字叶平声」と有って、その根拠として蒙齋（元の蔡正孫）の《詩林広記》（至元二十八年1921序）に載せる〈蔡寛夫詩話〉を引いてあった（広記の前集卷五）。「叶平声」とは、「十」の字は本来入声の字で（漢音シフ呉音ジフ）あるが、この場合は平声を読むべきだと言うのである。入声シフ（又はジフ）に対応する平声の音はシム（又はジム）だから、ハッシンジであるべきだが、わが国では早くから -ム音が -ン音に変化したから、その結果ハッシンジとなった。熊谷立閑の説を少し敷衍すれば、このようなことになる。

〈蔡寛夫詩話〉の著者は蔡啓、その生卒の年代は不明。たぶん南宋中葉以後の人であろう。三巻の旧抄本があるというが、郭紹虞氏も未見とする（《中国文学批評史》，上冊，1934，上海，p.377）。郭氏はその輯本を作った。この一条は《詩林広記》よりも《苕溪漁隱叢話》前集卷二十一に引く所がくわしい（郭紹虞：《宋詩話輯佚》1937年，北平，卷下，p.22）。《叢話》による全文を次にかかげる：

詩人用事，有乗語意到處，輒從其方言為之者，亦自一体，但不可為常耳。吳人以作為佐音，淮楚之間以十為枕音，不通四方，然退之“非閣復非橋，可居兼可過，君欲問方橋，方橋如此作”，樂天“綠浪東西南北水，紅欄三百九十橋”，乃皆用二音，不知當時所呼通爾，或是姑為戲也。

（郭氏注：〔韓詩〕集橋作船）

つまり詩人の作品に方言を用いた句があると言うのであって、その例として退之（韓愈）および樂天（白居易）の作を一首ずつあげた。詩話や詩の注釈において、方言というのは必ずしも dialect ではなく、単に俗語の義に用いられることがあるが、ここでいう方言は地域を明記するから dialect の義に解することができる。蔡氏によれば「作」を「佐」と同じように発音するのは吳（今の江蘇省南部）の方言であり、「十」を「枕」と同じように発音するのは淮楚之間の方言であって、これは南宋時代の事実であろう。そして唐代にも似たような地方なまりがあって、詩人はそれを作品にとり入れたらしいが、一時のたわむれだったかも知れない、というわけである。淮楚之間とは、大体いまの江蘇省北部から安蘇省北部へかけての地域を指すと思われる。

「作」の字については今ここには論じない。「十」を「枕」のように読むのだとすると、「枕」は「謹」などの字と同じ音で（《広韻》下平二十一侵の韻に在る）、現代音ば chén であるが、漢音ではシム（シン）となる。氏任切、禪母三等の字。例とされた白居易の作

は律詩（《白氏後集》卷七正月三日間行）であって、作詩法の規則どおりならば、「紅欄三百九十橋」の「十」の字は平声の字の置かるべき処であるのに、入声の字になっている。破格であるが、もしシムの平声を読むならば、破格でなくなる。

私の考えを述べるならば、詩として論ずれば、唐代の名家の作にも、平仄の規格どおりでない句を含むもの、つまり破格の詩は少なくないのであって、それらを一々字を読みかえなくてもよいと思う。もっとも押韻の不規則なものは別で、蔡氏があげた韓愈の詩は押韻の字だから、問題はちがう。韻脚以外では、あまりこだわる必要がない。だから、白居易の「三百九十橋」をキューシンケウと読んだり、杜牧の詩の「八十寺」をハッシンジと読んだりするには及ばない、というのが私の意見である。

しかし、それだけではなく、「十」の字が漢音で言えばシムと読まれたこともある理由、およびそれがどんな場合にもシムと読まれたのではない事などは、中国の言語史の事実であるから、それらの点について以下すこしく述べたく思う。

実は私はずっと以前から、この問題が念頭にあった。最初にヒントを与えてくれたのは次にかかげる陸游（1125～1210）のことばであった：

故都里巷間人言利之小者曰八文十二，謂十為謹，蓋語急，故以平声呼之。白傳詩曰，綠浪東西南北路，紅欄三百九十橋，宋文安公宮詞曰，三十六所春宮館，二月香風送管絃，晁以道詩亦云，煩君一日殷勤意，示我十年感遇詩，則詩家亦以十為謹矣。

（《老学庵筆記》卷五）

ここにいう故都とは北宋のみやこ開封をさす。「八文十二」の正確な意味は未詳。八文の錢（値段）で十二個の義、つまり二束三文などの意味に近い言いまわしであろうか。この言及の価値は、さきの蔡啓のごとく単に「十」の字は「忱」（＝謹）と同音によぶと言うだけでなく、俗語の実際の用法を挙げた点にある。北宋開封地方の発音——その音の体系——については、周祖謨氏の研究〈宋代汴洛語音考〉（《漢語音韻論文集》，上海，1957）によって大略を知ることができる。それによると、「十」と「二」の推定音は *zip* と *ni* であったはずである。「十」は禅母緝韻（深攝入声），「二」は日母至韻（止攝去声）だから、正規の音は上のようなになる。ところが「里巷間人」が「八文十二」と言うとき、その「十」は「謹」と同音だったと陸氏は記するから、現実には「十二」は *zim-ni* と発音されたであろう。陸氏は北宋の末に生れたが、開封のことばをその土地で学んだのではなく、父母または友人から伝聞したのであるが、その記述は信頼すべきである。そうだとすれば、唐代までさかのぼることができるだろうか、私はできると思う。その確証を次にしる

そう。

私は一昨年のロンドン大学の雑誌(《Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London》)に載せられた Walter Simon 教授の文を読んで、久しく蓄えた疑いの氷解するを覚えた。Simon 氏の文は、〈A note on Chinese texts in Tibetan transcription〉と題し (BSOAS. vol. XXI, part 2, London, 1958), ロンドン (India office) およびパリ (Bibliothèque nationale) に蔵せられる敦煌写本類の中で、Tibet 文字をもって漢文の音をうつした texts についての覚え書きであって、文中に引用された specimens が9種ある。そのうちの二つ (7) と (2) を Simon 氏の romanize したものに従って次にかかげる¹⁾。漢字は原文になく、加えられたもの:

(7a) The Multiplication Table=Paris 1256 (livre 1~3): // gyihu 九 gyihu 九 pa 八 śib 十 'yir 一 / par 八 gyihu 九 tshi 七 śim 十 zi 二 / tshir 七 gyihu 九 lug 六 śib 十 sam 三 // lug 六 gyihu 九 hgu 五 śib 十 zi 四 / hgu 五 gyihu 九 zi 四 śim 十 hgu 五 / zi 四 gyihu 九 sam 三 žib 十 lug 六 // sam 三 gyihu 九 ži 二 śib 十 tshir 七 / ži 二 gyihu 九 'yi 一 śib 十 par 八 // 'yi 一 gyihu 九 ži 如 gyihu 九 / 〃 / par 八 par 八 lug 六 śib 十 zi 四 / tshir 七 par 八 hgu 五 śib 十 lug 六 lug 六 par 八 zi 四 śib 十 par 八 / hgu 五 par 八 zi 四 śib 十 / zi 四 par 八 sam 三 śim 十 ži 二 / sam 三 par 八 ži 二 śib 十 zi 四 / ži 二 par 八 'yi 一 śib 十 lug 六 / 'yi 一 par 八 ži 如 par 八 / 〃 // ……

(Simon, p. 342)

(2b) Saddharmapuṇḍarika-sūtra (Fragment I) = Paris 1239: …m / phu 普 mun 門 phyim 品 de 第 ži 二 śim 十 hgo 五 / ži 爾 śi 時 bu 無 dzin 尽 'i 意 bu 菩 sar 薩 / tsiḡ 即 dzuñ 從 tshva 坐 khi 起 phyan 偏 dan 袒 yeḡu 右 kyen 肩 / hab 合 joḡ 掌 ho 向 phur 仏 ži 而 tsag 作 śi 是 hgyen 言 / : / hbyeḡu 妙 phab 法 len 蓮 hva 華 kye 經 / kvan 觀 śe 世 'im 音 bu 菩 sar 薩 phu 普 mun 門 phyim 品 deḡi 第 ži 二 śim 十 hgo 五 / ži 爾 śi 時…… (Simon, p. 341)

(7) は九九の表、(2) は法華經普門品の首の部分(残欠)であるが、これらは敦煌発見の Tibet 文写本の他の例と同じく9世紀前後の写本であろう。私の目を特にひいたのは、数詞の「二」は常に ži と うつされるが、「十」は śib と うつされることが多いのに、「五」および「二」の前にある場合に限り śim と 音訳されたことである。「十五」は śim-hgu (法華經では śimhgo), 「十二」は śim-ži. この hg- は弱い鼻音を帯びた g- 音を表わす

註 1) 印刷の都合により、原文の h を *h* で示す。

に違いない。法華經の妙が *hbye hu* とうつされるのも *b-* の前の弱い鼻音を表わす。唐代中葉（8世紀）以後、鼻音の声母（*m-*, *n-*, *ng-*）は、鼻音的要素が非常に弱まりほとんど消失し、いわゆる *denasalization* の現象が一般的であったことは周知のごとくである（日本の漢音で「馬」をバ、「内」をダイと読むのは、この現象を伝える）。*hg-*, *hb-* などの音訳は、*ng-*〔*ng-*〕, *mb-* の鼻音的要素がまだ完全には消失していないことを示すと言えるだろう。入声の韻尾子音（ふつう *-p*, *-t*, *-k* で表わされる内破音）は Tibet 文の音訳では *-b*, *-d*, *-g* でうつされるのを常とする。唐代にその音価が *-p* 類の清音（無声子音）であったか、*-b* 類の濁音（有声子音）であったかは定め難い。しかし入声韻尾の子音としては、清濁の対立はないから、以下では便宜上すべて *-b* 類を用いて示す。

「十」の韻尾子音は *-b* であったが、次に鼻音が直ちに接する時に限り、後続鼻音の影響をうけて *-b* が *-m* となったことは、容易に了解できる。「十五」とつづくときの「十」が *sim* とうつされた原因はこのようなものである。「十二」が *šib-zi* であるべきにも拘わらず *sim-zi* とうつされた理由は、少しく複雑な点がある。この *z-* は Tibet 文の習慣から見て、鼻音的要素を表わすと解しえないからである。だが、それも「二」の声母である日母の由来を考えれば、決して困難なことではない。

Karlgren 氏の研究によれば、日母の歴史的音韻変化は次のようであった。

ń->ńz->z->œr

この *ń* は口蓋音で日本語のニャ、ニユ、ニョの子音に似た音。（*Études sur la phonologie chinoise*, p. 457 以下、漢訳《中国音韻学研究》，上海，1940，p. 338以下）。

この最後の二段階にあるのが現在の北京語であるが、日母の発展（*evolution*）が、この五段階を経過したことについては、恐らく言語史家のひとしく認める所であろう。ただ、それぞれの段階を歴史上のどの時期に当てはめるかについては異論がありうる。私は H. Maspéro 氏に従って、切韻の言語（Karlgren 氏のいわゆる中古漢語 *Ancient Chinese*）ではまだ *ń-* の段階に在り、唐代に入って *ńz-* の如き摩擦音的要素が加わり、やがて鼻音的要素が失なわれたものとする。この *z-* は日本語のカジ（火事）スジ（筋）などのジの子音に類似した音である（拙稿＜你と爾および日母の成立＞—《言語研究》，第24号，東京，1953年）。董同龢氏（《中国語音史》，台北，1955年，再版本，p. 96）および李榮氏（《切韻音系》，北京，1956年，p. 125~126）も、切韻音については私の考えとほぼ同様。なお *ńz->z* の変化がおこった年代に関しては、最近水谷真成氏の研究によって新らしい知見がえられた（日母の非鼻音化は8世紀までさかのぼる。＜慧苑音義音韻攷＞，《大

谷大学研究年報》，十一集，1959，京都，p.75，なお，参照＜唐代における中国語頭鼻音の Denasalization 進行過程＞《東洋学報》39巻，4号）。

日母の発展を考慮に入れるならば，「十二」 *śib zi* > *śimzi* の変化は，実は：

śib + (弱い鼻音) + *zi* > *śimzi*

であった。すなわち「十五」 *śib* + [ŋ] *gu* > *śimgu* の変化と同じく，後続鼻音による同化 (assimilation) によって起ったものである。ただし鼻音的要素は，日母の場合，他の声母 *m*- (明母) *n*- (泥母) *ng*- (疑母) に比べ，一層よわくなっていた可能性がある。9世紀ごろには，ほとんど消失していたかも知れない。Tibet 文字が *ś*- でうつしたのは，そのためであろうか。とすれば，「十二」の音変化について二様の説明が考えられる。第一は日母は9世紀ごろもなお鼻音的要素を全く失ってはいなかった (*ńz*-) が，極めて弱かったから Tibet 人はこれを *ś*- でうつした，けれども先行の *-b* を *-m* に変える影響力はまだ保持していた，とする説。第二は，日母は9世紀以後，鼻音的要素を失ってしまった，しかしそれ以前，鼻音を有していた時期に，先行子音 *-b* > *-m* の変化を生ぜしめ，その変化した形が9世紀以後も語音として使われていた，とする説。私は今，より古い資料を有しないから，断言しえないが，恐らく第二の説が合理的であろうかと考える。

要するに「十五」，「十二」の「十」が *śim* (即ち「謹」「枕」と同音) と発音されたのは，以上の如き同化 (assimilation) の結果と考えるものであり，しかも「十二」，「十五」の場合に限るのだから，「十」の字はいつでも *śim* とも読まれたと言うことはできない。ただし入声の韻尾子音 (*-b*, *-d*, *-g*) が唐代においてすでに脱落し易かったことは，さきに引いた Tibet 文の二つの資料からも知られる。それは別の現象であって，そこから言えば，「十」の字を平声に読むとの説も根拠がないわけではないが，そうなれば，これは入声の全体についての事であって，独り「十」の字だけの問題ではなくなる。いずれにせよ，「八十寺」をハッシンジと読む必要は少しもないわけになる。

さて陸游のことばにもう一度もどろう。さきに一言した如く，これは北宋末の開封において，「十二」が *śim-ni* と発音されたことを記録した資料である。私は周祖謨氏に従ってこの北宋音を *ni* と書き表しておいたが，少しく疑問がある。けれどもそれについて今くわしく論ずる余裕がないから，他の機会にゆずることとし，別に付け加えておきたいことがある。陸氏が南宋の人であったのに，“故都里巷間人”云々と言って，南宋の事実上の首府であった臨安（即ち杭州）の言語について何も言及しないことである。実際に杭州のことばでは「十二」を *śim ni* と発音することが無かったのかどうか，今は知るよしもな

いが、それよりも、陸氏の記述の態度は、かれが開封こそ我が宋の首都だとの意識を示すものと理解すべきであろう²⁾。杭州に南宋の天子は住んだが、そこは“行在”とよばれていた。あくまで臨時の都であって正式の首都ではなかった。失地回復を一生主張しつづけた“愛国詩人”の称ある陸游にとっては、ことにこの意識は強かったに違いない。

陸氏は同じ《筆記》の別の処で、当時の中国各地の方言音になまりが多いが、中原の地では洛陽の語音が最も正しい、と言う：

四方之音、有訛者則一韻尽訛。如閩人訛高字、則謂高為歌、謂勞為羅。秦人訛青字、則謂青為妻、謂經為稽。蜀人訛登字、則一韻皆合口。吳人訛魚字、則一韻皆開口。他放此。中原惟洛陽得天地之中、語音最正。然謂絃為玄、謂玄為絃、謂犬為遄、謂遣為犬之類、亦自不少（《老学庵筆記》，卷六）。

陸氏のこの言は北宋以来の伝統をうけている。北宋の寇準（951～1023）が丁謂に語ったことばとして伝えられるものに、西洛（＝洛陽）の語音が最も正しい、とある：

寇萊公与丁晋公同在政事堂、一日論天下語音何処為正。萊公言西洛人得天地之中。丁曰、不然、四方皆有方言、惟讀書人然後為正（《宋人軼事彙編》卷五に引く〈談撰〉）。

私はかつてこの語を引き、北宋の首都開封は新興の都市であって、後漢および西晋以来ながら文化の中心であった洛陽の言語（特にその発音）が宋代でも中国全体の標準と認められていた、と述べた（〈蘇東坡古詩用韻考〉、《京都大学文学部五十周年記念論集》、1956年、京都、p.863、補注1）。言語上のことについて保守的であるのは、独り旧中国の読書人だけではなく、いずれの国にも見られる所である。陸氏は杭州の方言などは無視し、唐詩の読み方についての旁証として開封の俗語を引いたが、その開封の言語でさえ標準とするに足るものとは認めなかったのである。ただし、蔡啓が陸氏と同じ現象を淮楚の間の方言として述べているのを見ると、たぶん“八文十二”などの場合「十二」を *sim ni*(?) と発音することは開封のみでなく、その周辺の地域にひろまっていたと思われる。淮楚の間とは開封が位する今の河南省に最も近く、かつ南宋の領域内の地域であった。そしてこの語の発音が前述のごとく唐代にはすでに始まっていたことを想起すると、三百年以上ひきつづいて少しずつ広まっていたわけになる。もっとも、敦煌文書の特に Tibet 文字の記入のあるものは、西北地方で作られたはずであるから、私の証拠にそなえた唐代の資料

註 2) 南宋の陳鵠の言に、「郷音是処不同、惟京師天朝得其正」（《耆舊統聞》知不足齋叢書本、卷七とある。南宋の人々にとって、やはり開封のことばが標準語と考えられたことを示す。師は開封をさす。なお文中の「是処」は「到處」に似た義。

は実は唐代西北方言の資料である。この音の変化は、むしろ唐の都長安に始まったものであって、それが洛陽・開封まで波及したのかも知れない。

さらにもう一言つけくわえたい事がある。「十二」が *šip-ni* (?) > *šim-ni* の変化だったとすると、これは後の子音が前の子音を同化したのであって、言語学者はこれは逆行同化 *regressive assimilation* とよぶ。これに対し、前の子音が後の子音を同化する場合もあって、これを順行（或いは進行的）同化 *progressive assimilation* とよぶ。私の知る所では、現在の湖北省の武昌・漢口その他十六県の方言で、「目」・「木」などを *mong* と発音するのが、この進行的同化の一例になる。本来 *muk* 又は *mok* の音であつた字が *mong* と発音されるのだが、これは声母の *m-* が音節の終の子音 *-k* に影響して *-k* を *-ng* にかえたわけである。「目」・「木」のあとにどんな声母の字がつづくかとは無関係である。たとえば「目的」は *mongti* と発音される（《湖北方言調査報告》，1948年，上海，p.65, 67, 87, 89 etc.）。湖北省の方言音にはいろいろ興味ある事がらが見出されるが、これはその一つである。

Assimilation の例は古代の言語にも多い。その多数の実例は俞敏氏³⁾の研究などに見ることができるから、今くわしく述べることを省く。

註 3) 俞敏：＜古漢語裏面的連音變讀（Sandhi）現象＞（《燕京學報》，第35期，pp. 29～50，北平，1948年）